

第 78 回 歴史リレー講座「法隆寺の謎を探る」 森下 恵介氏 (R3.3.21)

今年は聖徳太子没後 1400 年という年にあたります。太子ゆかりの法隆寺は世界文化遺産に登録される現存世界最古の木造建造物ですが、『日本書紀』天智天皇 9 年 (670) 4 月には「法隆寺災 (ひつ) けり 一屋余すところ無し」という記事があり、現在の法隆寺伽藍はその後に再興されたものとするのが通説になっています。法隆寺は謎が多く、例えば金堂にある本尊の釈迦三尊像は不思議と焼失を免れています。この講座を通じて、法隆寺にまつわる謎をみなさま自身で考えて頂ければと思います。

法隆寺は江戸時代までは、「推古天皇建立のまま」というのが一般的でしたが、明治時代より再建、非再建が論争され始めます。『日本書紀』の研究が進んだ明治 20 年頃になると、『日本書紀』には天智天皇 8 年と翌年の 9 年の 2 回、法隆寺の火災記事があり、これに注目した国史学者のおとうそん小杉楯邨らは、現在の法隆寺は奈良時代の和銅年間に再建されたものと主張しました。

これに対し、実物を重視する建築史学者のただし関野貞は、法隆寺の建築には飛鳥時代のこま高麗尺が使用されていること、伽藍に火災の痕跡が無いことなどから、『書紀』の記述は誤りだと反論し、さらに、美術史学者の平子尚が「天智 9 (670) 年庚午は干支を 60 年くりあげた推古 18 年 (610) 庚午の誤り」と指摘しました。

『書紀』の高い信頼性を訴える歴史学者の喜田貞吉 (小杉の弟子) も負けずに応戦し、非再建派の尺度論や様式論を否定、先入観による妄想だと切り捨てました。その後、立場が異なる「実物学派」と「文献学派」からの材料は出尽くし、論争は下火になって行きました。

ところが、大正時代に入ると学説に変化が起こり始めます。伽藍に焼跡が無い説明に苦慮していた再建派の喜田は、「寺地移動説」を発表。文献だけでなく実物資料をも考慮したもので、推古朝の法隆寺は斑鳩宮にあったのではないかという考え方です。また、仏教学者の小野玄妙は、法隆寺が焼けたのは皇極 2 年 (643) の蘇我入鹿による斑鳩宮焼失時であり、大化 3 年 (647) に再建が始められたのではないかという説を唱えました。

大正の終わりから昭和にかけての防火水道工事の際には、大量の古瓦が出土し、地下遺構が注目されるようになりましたが、西院伽藍 (現在の法隆寺) からは火災を受けたような焼瓦は発見されませんでした。また、五重塔心柱下部に空洞が見つかり、探索した結果、心礎から舍利容器が見つかりました。西院伽藍から出土した軒瓦とともに、これらは 7 世紀後半のもので、聖徳太子の時代よりも新しいものと考えられるようになりました。

昭和 2 年には、関野貞は、天智 9 年の火災を認め、罹災したのは推古 31 年の釈迦三尊像を本尊とする斑鳩寺 (若草伽藍) のことだとしたうえで、推古 15 年に薬師如来像を本尊として建立されたのが現存する法隆寺であると「二寺説」を唱え、非再建の立場を堅持しました。昭和 14 年になると、建築史家の足立康が斑鳩寺 (若草伽藍) の北側に太子を祀る釈迦堂が建てられ、これが後の法隆寺となったという「二寺並立説」を唱えます。この説は『日本書紀』、銘文、建築様式の矛盾の無い折衷案でした。昭和 14 年には若草伽藍の発掘により、前身寺院の存在が確認され、この寺が天智 9 年に全焼し、現在の法隆寺 (西院伽藍) はそれ後に再建されたという再建説が定説化して行きます。明治以来の論争は法隆寺の研究、学問の質を高めたといっても過言ではありません。

残された問題としては、本当に法隆寺の火災は本当に天智 9 年なのかどうか。火災後、なぜ元の寺地に再建しなかったのか。火災をまぬがれた釈迦三尊像はどこに本来祀られていたのか。若草伽藍と西院伽藍平瓦文様に見られる連続性、法隆寺は誰が何のために再建したのか。建築部材の年輪年代が天智 9 年より古いのはなぜか…新しいことが判るとまた新しい謎が出てきます。

聖徳太子のしなが磯長墓 (大阪府太子町の上城古墳) についても推定される七世紀中頃以降の岩屋山式石室、乾漆棺が棺台上にあったのでは、太子の薨去 (622 あるいは 623 年) ですので、時期的に矛盾します。聖徳太子墓は七世紀中頃～後半に修造、改葬された可能性があります。こうした法隆寺再建や太子墓の改装は、上宮王家を押さえて皇位に就いた七世紀後半の舒明王朝の王権の正当性を主張するための行為なのではないでしょうか。